

短 報

親子で学ぶ性教育プログラムに対する親の期待

若井和子^{*1} 秦久美子^{*2} 渋谷洋子^{*2} 藤井清美^{*2}

要 約

本研究は、3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラムに参加を希望した親をタイプ別に分類し、性教育プログラムに対する親の期待について把握することを目的とした。

研究方法は、幼稚園および保育園に通園する3～4歳児クラスの親のうち、3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラム第1回目に参加した親に自記式質問紙調査を実施した。参加した親の特性を探るためにクラスター法（ケース）を用いて親のタイプを分類した。更に親子と一緒に性教育を学ぶことに対する思いについて、Text Mining Studioを用いて親のタイプ別に分析を行った。

その結果、①幼児期から親子で学ぶ性教育に参加を希望する親のタイプは「自律型」、「教育型」、「密着型」の順に多い。②親子で学ぶ性教育プログラムに参加を希望する親は、社会的・情緒的発達を促す内容を期待していることが明らかになった。

1. はじめに

オランダ・スウェーデン・アメリカなどでは、性教育を早期に開始することが望ましいとされ、助産師などの専門職に子どもたちが安心して性に関する相談ができる環境に整備されている。またカナダにおいて、性教育を受けた子どもは、性的虐待や搾取の犠牲にならないと表明し、公費負担によりファミリーセッション方式で幼児期の親子を対象とした性教育活動が展開されている¹⁾。

これに対してわが国は、『学校における性教育の考え方²⁾』に、幼稚園の性教育目標として「自分の誕生」、「男女の違いの認識」、「生命の尊さ」、「男女の人間関係の基礎」、「男女のいたわり合い」が明記されているが、性教育活動は消極的な現状がある。その原因として、性教育について一般的に生殖に関する教育と認識されており、幼児期から性教育を開始することに抵抗感を抱いている人が多いことがあげられる³⁾。また子育てに関わる親や教師（保育士を含む）は、実母から性教育を受けた経験が少なく、大半が学校で人間の生理的側面に関して、保健体育に位置づけられた内容を学習してきた⁴⁾。このような背景をもつ親や教師が子どもから受けた質問に満足な対応ができないことが問題とされている⁵⁾。こ

の現状に対して研究者らは、質問期にある子どもの疑問に親が自信をもって対応できる性教育プログラムの開発が必要であると考えた。

そこで本研究は、3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラムに参加を希望した親が本プログラムに求める期待について把握することを目的とした。

2. 研究方法

2.1 対象者の選定

対象：A市内の幼稚園および保育園に通園する3～4歳児クラスの親子。

対象者選定方法：A市内の施設長または園長に連絡を取り、本研究の主旨を口頭で説明し、協力の可否を確認した。協力の承諾があった施設に、研究協力依頼書・研究の方法と内容（3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラム全4回日程含む）・同意書を保護者に配布し、研究協力の承諾を得た親子21組を対象とした。

調査時期：平成24年6月～7月。

2.2 3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラムの内容

親子性教育プログラムのテーマは、幼稚園の性教育目標に対応させた4つ（第1～4回）に絞った。レ

*1 福山平成大学 看護学部 看護学科 *2 兵庫大学 健康科学部 看護学科
（連絡先）若井和子 〒720-0001 福山市御幸町上岩成正戸117-1
E-mail: settle@heisei-u.ac.jp

クチャーに使用する教材は、3～4歳児の発達に合わせたa：エプロンシアター（胸当てエプロンを舞台にして、ポケットから子宮・胎児・胎盤を取り出しながら説明する方法）、b：ペープサート（紙人形の中で、紙に人形を描いて切り抜いて棒を付けて揺らす、裏表に動かすなどして演じる方法）、c：パネルシアター（布製パネルに切り抜いた人形を貼りながら話を進めていく動きのある紙芝居に類似した方法）とした。

第1回：はじめましてあかちゃん（同年8月実施）

エプロンシアターを教材とし、子宮内の胎児の発育、誕生の過程、いのちの誕生を喜ぶストーリーを構成した。

第2回：生まれてきてくれてありがとう（同年9月実施）

ペープサートを教材とし、第1回で学習した赤ちゃんの誕生過程を想起させるため、新しいきょうだいの誕生場面を物語に含めた。物語を通して対象児に生まれた時の家族の喜びを認識させ、物語の最後に親子のスキンシップを取り入れることで親子一体感獲得を促すことをねらいとした。

第3回：子宮体験（同年10月実施）

大きな子宮と産道（母親のお腹の中のトンネル）を作成し、教材に用いて生まれる体験を行う。子宮内に入っている子どもは、外で待つ親と糸電話

で会話することで、お腹の中の赤ちゃんに外の声が聞こえていることを学習する。

第4回：男の子女の子の体の違い 大切な性器（同年11月実施）

パネルシアターを教材とし、男女の体の違い、プライベートゾーンを大切に保護しなければならない理由および清潔にする方法を学習する。

2.3 データ収集方法

調査方法：自記式質問紙調査法。

調査内容：親の属性に「年齢」、「父母別」、「性教育を誰から受けたか」、「プライベートゾーン（口・乳房・陰部）を教えたか」、「幼児期に性教育の必要性の有無」、「男女の体の違いを子どもに教えたか」、「赤ちゃんがどこから生まれるかを教えたか」を質問項目にあげ、研究者らが作成した「子どもへの関わり22項目（表1）」について、6件法（とてもよく当てはまる：6、当てはまる：5、やや当てはまる：4、やや当てはまらない：3、当てはまらない：2、まったく当てはまらない：1）で実施した。

質問紙の22項目は親の養育態度をタイプ別に分類するため、陳ら⁶⁾の子育て観尺度の考え方を参考に、子どもへの関わりに関する項目を①生活習慣の形成、②自尊心の育成、③役割・規範の学習の3つの視点から研究者らが作成した。

また、質問紙に「親子が一緒に性教育を学ぶこと

表1 子どもの関わりに関する質問項目

A 1	子どもといつも一緒にいる。
A 2	子どもの考えや気持ちをいつもわかってあげる。
A 3	子どものことなら、どんなことでも許せる。
A 4	子どものためなら、何でもしてあげる。
A 5	子どもが甘えられるようにしてあげる。
A 6	親が子どもの成長発達の手助けをする。
A 7	子どもに精神的安らぎを与えている。
A 8	子どものことを心から大切と思う。〔r > .7〕
A 9	子どもが困っているときは、一緒に考える。
A 10	優しい声で話しかけるようにする。
A 11	子どもに注意をするとき、わかるように言葉で教える。〔r > .7〕
A 12	親の気持ちを子どもに言葉で伝える。
A 13	親の気持ちを子どもに態度で伝える。
A 14	いつも子どもと食事を一緒にする。〔r > .7〕
A 15	いつも子どもと一緒に部屋で寝る。〔r > .7〕
A 16	いつも子どもと一緒に入浴する。
A 17	どんなに忙しくても、疲れていても子どもの話を聞いてあげる。
A 18	いつも子どもと外遊びをする。〔r > .7〕
A 19	常に子どもの気持ちを考えて行動する。
A 20	子どもにお手伝いすることを教えている。
A 21	男の子と女の子では、しつけが異なる。
A 22	お兄ちゃんとお姉ちゃんにはきょうだいの役割がある。

に対する思い」について自由記述欄を設けた。質問紙は、第1回目親子で学ぶ性教育プログラム実施以前に同意書と合わせて登園時に回収した。

2.4 分析方法

親のタイプ分類には、統計解析ソフト SPSS ver.20を使用し、親の属性について記述統計を行った。次に、参加した親の特性を探るためにクラスタ法（ケース）により、親のタイプを分類した。更に子どもへの関わり22項目の平均得点±標準偏差を求め、天井効果およびフロア効果のみられる項目をチェックした。次に22項目間の相関係数（ $r > .7$ ）の項目を除き17項目に整理した後、Tukeyによる多重比較を行い、有意差を認めた平均値のプロットより、各クラスタに名前を付けた。

幼児期に親子が一緒に性教育を学ぶことに対する思いについては、Text Mining Studio Ver. 5を用いて親のタイプ別に分析した。分析の順序は、単語頻度分析、注目語分析、特徴語分析、評判抽出、話題分析の順に行った。

2.5 倫理的配慮

研究協力者に、研究目的を口頭と文書で説明し、同意を得た。子どもの同意については、親の代筆と

し、協力の可否は自由決定であること、匿名性の保持、結果の公表などについて承諾を得た。本研究は、兵庫大学・兵庫短期大学部倫理委員会の承認（No.12005）を得て実施した。

3. 結果

3.1 対象者

対象者のうち母親20人、父親1人、平均年齢は、母親35.4歳（ SD 3.41）、父親36.9歳（ SD 4.07）、子どもの平均年齢3.3歳（ SD 0.47）であった。保護者が性教育を受けたのは、教師57.1%、親と教師の両方（38.1%）、受けたことが無い（4.8%）であった。幼児期に性教育を必要と回答したのは、84.2%であり、親が子どもに教えている性教育の内容は、男女の体の違い59.0%、赤ちゃんがどこから生まれるか59.0%、プライベートゾーンについて30.0%であった。

3.2 親のタイプ

対象者21人のうち4人に欠損値を認めたため、除外した。有効回答17人について、Ward法によるクラスタ分析（ケース）を行い、デンドログラムを作図し、3つのクラスタに分類した（図1）。表2のとおり、第1クラスタに4人、第2クラスタに11人、第3ク

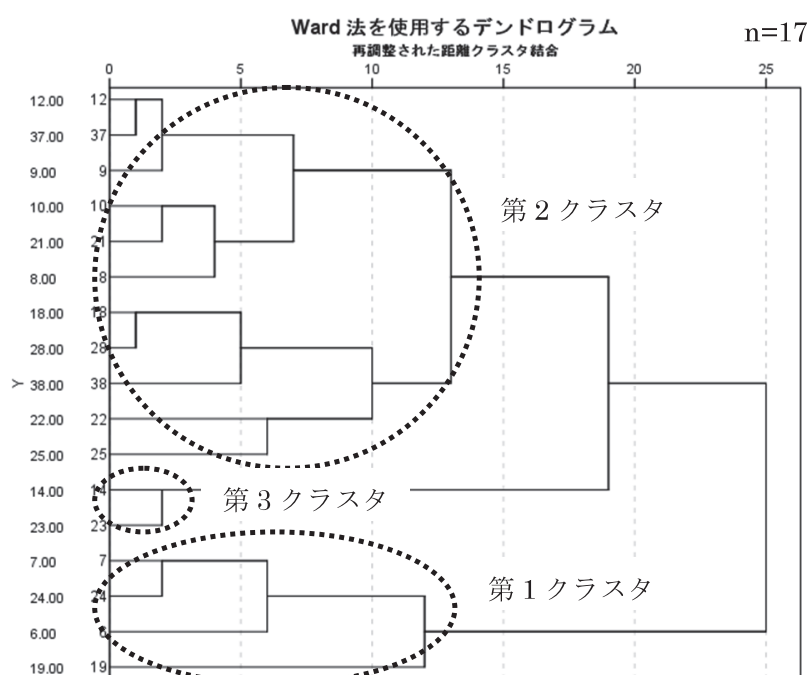


図1 クラスタ分析による親の分類

表2 各クラスタ間の差

	観測度数 N	期待度数 N	残差	検定
第1クラスタ（教育型）	4	5.7	-1.7	*]
第2クラスタ（自律型）	11	5.7	5.3	
第3クラスタ（密着型）	2	5.7	-3.7	

n=17

ラストに2人の対象者が含まれており、各クラス間の人数比率の偏りは、 χ^2 検定により有意差を認めた ($\chi^2=7.882$, $df=2$, $P<.05$).

表3は、子どもへの関わり17項目と各クラスとの Tukey による多重比較を行った結果、分散分析で有意差の見られた項目は「子どものことならどんなことでも許せる」、「子どものためなら何でもしてあげられる」、「子どもにお手伝いすることを教えている」、「男の子と女の子ではしつけが異なる」であった。これら4つの項目と3つのクラスの平均値プロットを図2に示す。

第1クラスは、「子どもにお手伝いすることを教えている」、「男の子と女の子ではしつけが異なる」が最も高かった。

第2クラスは、「子どものことならどんなことでも許せる」「子どものためなら何でもしてあげられる」が最も低く、「子どもにお手伝いすることを教えている」「男の子と女の子ではしつけが異なる」

が2番目に高かった。

第3クラスは、「子どものことならどんなことでも許せる」、「子どものためなら何でもしてあげられる」が高かった。

これらの結果から、親のタイプを示す第1クラスに【教育型】、第2クラスに【自律型】、第3クラスに【密着型】と呼称した。親のタイプは、「子どものことならどんなことでも許せる」、「子どものためなら何でもしてあげられる」は、【密着型】が最も高く、「子どもにお手伝いすることを教えている」、「男の子と女の子ではしつけが異なる」は、【教育型】が最も高い値を示した。

3.3 親のタイプ別にみた親子が一緒に性教育を学ぶことに対する思い

3.3.1 単語頻度分析

単語頻度分析により、テキストに出現した回数の多い順に「一緒:9回」、「子ども:7回」、「学ぶ:6回」、「良い:6回」、「話:6回」、「機会:5回」であった (図3)。

表3 質問項目と各クラス間の多重比較により有意差を認めたもの
Tukey HSD

従属変数		平均値の差 (I - J)	標準 誤差	有意 確率	95%信頼区間 下限	上限
子どものこと 許せる A 3	1	2 .43	.47	.63	-.79	1.65
		3 -1.25	.69	.20	-3.06	.56
	2	1 -.43	.47	.63	-1.65	.79
		3 -1.68*	.61	.04	-3.28	-.08
	3	1 1.25	.69	.20	-.56	3.06
		2 1.68*	.61	.04	.08	3.28
子どものため 何でもする A 4	1	2 1.05	.59	.21	-.50	2.59
		3 -1.00	.87	.50	-3.28	1.28
	2	1 -1.05	.59	.21	-2.59	.50
		3 -2.05*	.77	.05	-4.07	-.02
	3	1 1.00	.87	.50	-1.28	3.28
		2 2.05*	.77	.05	.02	4.07
お手伝い教え る A20	1	2 .59	.31	.17	-.22	1.40
		3 1.50*	.46	.01	.30	2.70
	2	1 -.59	.31	.17	-1.40	.22
		3 .91	.41	.10	-.15	1.97
	3	1 -1.50*	.46	.01	-2.70	-.30
		2 -.91	.41	.10	-1.97	.15
男女のしつけ の違い A21	1	2 2.82*	.39	.00	1.81	3.83
		3 3.50*	.57	.00	2.00	5.00
	2	1 -2.82*	.39	.00	-3.83	-1.81
		3 .68	.51	.40	-.65	2.01
	3	1 -3.50*	.57	.00	-5.00	-2.00
		2 -.68	.51	.40	-2.01	.65

* $P<.05$

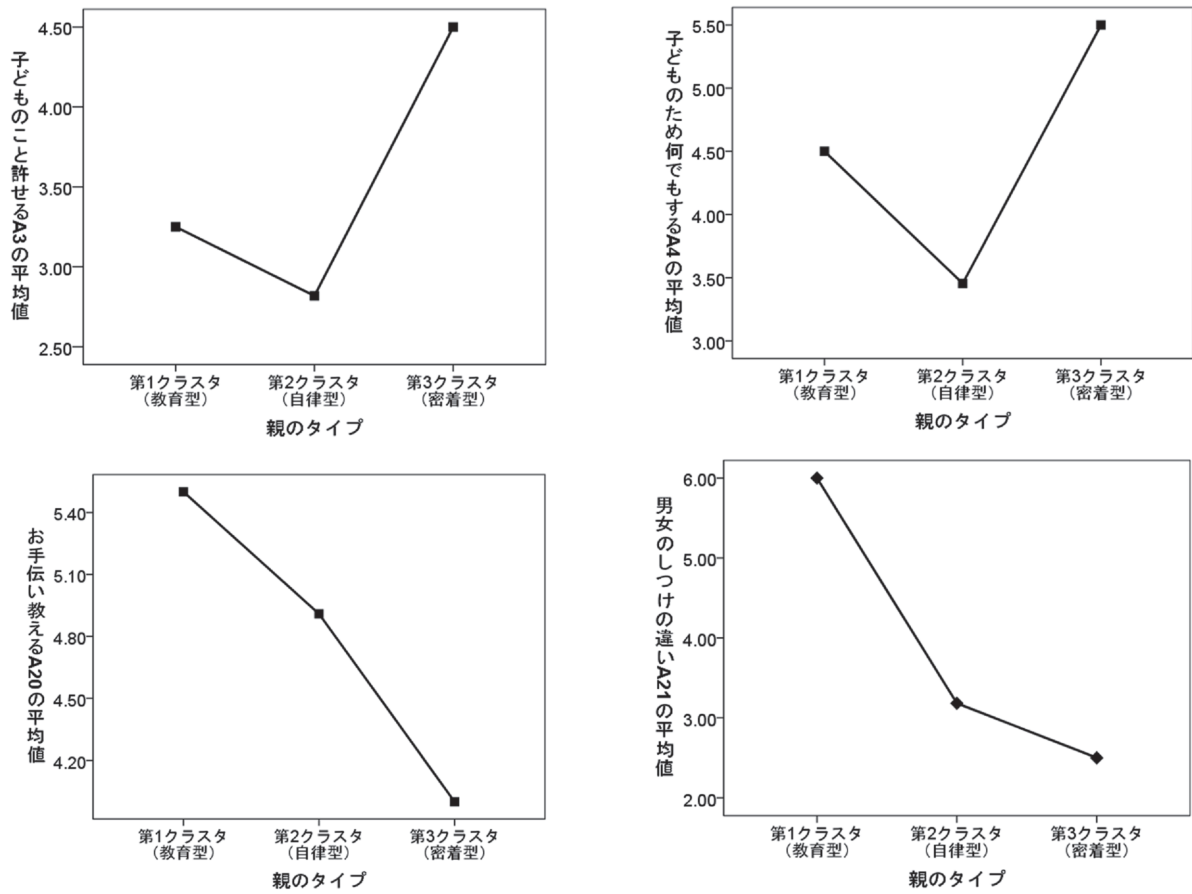


図2 各クラスターの平均値

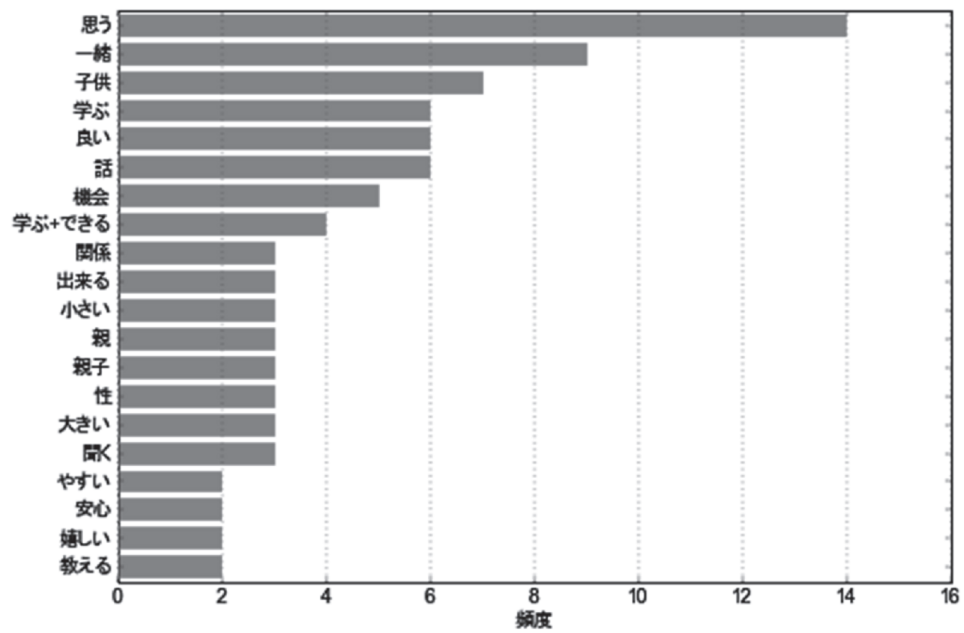


図3 単語頻度分析

しか一緒に学べないと思うので、このような機会は良いと思う」、「性教育にも色々あるので、一緒に学べるというのは安心」であった。【密着型タイプ】については、「機会」との関係が強く示されており、原文をみると「なかなかこういった機会に触れることがないので、小さなうちから正しい知識で触れることは良いと思う」、「滅多にないことなので、非常に良い機会と思う」、「いつもの生活にないお話なので、このような機会はありがたい」、「今の小さい時期にしか一緒に学べないと思う」、「このような機会は良いと思う」とあった。

4. 考 察

自己概念が発達する幼児期に「自分の誕生」、「男女の違いの認識」、「生命の尊さ」、「男女の人間関係の基礎」、「男女のいたわり合い」について学習することは、子どもが自己存在の価値観を認識でき、自尊感情を育む機会となる。

池田は⁷⁾、自尊感情が4つの概念（包み込まれ感覚・自己受容感覚・自己効力感・社交性感覚）で構成されており、自尊感情の基礎となる「包み込まれ感覚」を育成することができなければ、他の構成概念を育成することが難しいと述べている。親子が一緒に学ぶ環境は、子どもが五感を働かせて学習したことを親が把握することができる。中島は⁸⁾、子どもの認知の特徴をピアジェの前操作的段階における自己中心性に照合して、直観的であることを指摘し、自己の知覚や認知が全てで見たもの、聞いたこと感じたものは、親も自分と同様に認知していると思い込んだ状態になると述べている。幼児にとって親と一緒に学習できる環境は、親に子どもの思い込み状態を把握してもらい、受容される距離である。まさに、「包み込まれ感覚」の育成とも言える。

今回の調査では、幼児期3～4歳児親子で学ぶ性教育プログラムに参加を希望した親のタイプを【自律型】、【教育型】、【密着型】の3つに分類することができた。対象者が親子で学ぶ性教育の受講希望者であったため、幼児期から親子で性教育を始めることに対する負のイメージはなく、半数以上が【自律型タイプ】を占めていた。これらのタイプと幼児の発達から、親子で学ぶ性教育に参加を希望した親が本プログラムに対して期待していることについて考察した。

【自律型タイプ】は、幼児期から性に関することを親と子が共に学ぶことで恥ずかしがらずに相談し合える親子関係を築くことが可能であると建設的な期待感を有している。対象者の半数以上が男女の体の違い、赤ちゃんがどこから生まれるかを教えて

いるが、プライベートゾーンについて教えている人が30%と低いのは、親が恥ずかしがって子どもに教え難い状況になっていることが予測できる。【教育型タイプ】は、「学ぶ+できる」「教える」との関係が強いことから、親子で学ぶ性教育の参加は、親が教え難いことを親子で学習する場ととらえられている。【密着型タイプ】は、幼児期の思考の特徴が直観的であるから性に関する先入観なしに受け入れることができるととらえている。

これらの所見は、1991年に藤崎⁹⁾が幼稚園に対する親の期待を日米比較したものに類似しており、日本の結果は20余年後も幼稚園に教育を委ねたい傾向を示していた。幼稚園が子どもの社会的・情緒的発達を促すことを90%の日本の親が期待しているのに対して、米国の親は55%に過ぎない。学習経験を期待する親は日本では3%であるが、米国では28%という測定値を報告し、文化的背景の差が原因であると指摘している。また野口ら¹⁰⁾は、70%以上の保護者および保育士が性教育についての学習を希望していることを調査結果に示している。

本研究における【自律型タイプ】は、親子で性教育を学ぶことに対して、両者の関係を築くことが期待されており、【教育型タイプ】は、親子が一緒に性教育を学び、親が家庭で教えることが可能となる内容を求めている。【密着型】は、先入観のない幼児期に性に関する内容を直観的に学習できる内容を期待している。以上より、筆者らは社会的・情緒的発達を促す内容を踏まえた親子で学ぶ性教育プログラムを検討するうえで、親が子どもに繰り返し活用できる教材製作が必要であることを明確にした。

5. 結 論

本研究において、以下のことが明らかとなった。

- ①幼児期から親子で学ぶ性教育に参加を希望する親のタイプは【自律型】、【教育型】、【密着型】の順に多い。
- ②親子で学ぶ性教育プログラムに参加を希望する親の半数以上が【自律型タイプ】であり、社会的・情緒的発達を促す内容を期待している。
- ③【教育型タイプ】および【密着型タイプ】は、レクチャー参加により共有し、親が家庭で活用して性教育できる教材を期待している。

6. おわりに

今回の調査結果は、標本数が21件であったため、内容分析に限界があった。信憑性の高い分析を行うために研究を継続し、親が家庭で性教育を行うことができるプログラム作成が課題の1つとなった。

本研究は、兵庫大学附属研究所指定研究プロジェクトの助成を受けており、一部、第33回日本看護科学学会において発表した内容に加筆修正したものである。

文 献

- 1) Meg Hickling：子どもの虐待とネグレクト．日本子どもの虐待防止研究会，3(1)，27－32，2001.
- 2) 文部省：学校における性教育の考え方，進め方．4版，ぎょうせい，東京，30－32，2003.
- 3) 及川裕子：幼児期の性教育の課題－保育者の意識調査を通して－．日本赤十字武蔵野短期大学紀要，14，159－164，2001.
- 4) 鈴木智美，沖野良枝，番場妙子，村上京子：幼児期の子供に対する母親の性教育の認識と現状．帝京平成短期大学紀要，12，9－15，2002.
- 5) 遠藤恵子，井上京子，坪井禮子，石沢セイ子，松田水月，佐藤弘美：幼児に対する性教育の実態．山形保健医療研究，10，1－9，2007.
- 6) 陳東，森恵美，望月良美，柏原英子，安藤みか，大月恵理子：乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発．千葉看護学会誌，12(2)，76－82，2006.
- 7) 池田寛：学力と自己概念．初版，解放出版社，東京，31－32，2000.
- 8) 中島力：子どもの社会的発達．初版，ソフィア，東京，91－92，1993.
- 9) 藤崎真知代：新・児童心理学講座第11巻 子どもの遊びと生活．初版，金子書房，東京，66－70，1991.
- 10) 野口ゆかり，谷恭子，野見山美和，榎園一二三，尾島聖子，福島美絵，後藤さゆり，福島美絵，平田伸子，新小田晴美，加未恒壽：幼児期の性教育－幼児期における性に関する保護者・保育士の対応の比較検討－．母性衛生，42(1)，155－162，2001.

(平成26年12月2日受理)

Expectations That Parents Have for Sexual Education Programs That Parents and Children Learn Together

Kazuko WAKAI, Kumiko HADA, Yoko SHIBUYA and Kiyomi FUJII

(Accepted Dec. 2, 2014)

Key words : sexual education, children, parent and child, parent type, cluster analysis

Correspondence to : Kazuko WAKAI

Department of Nursing Faculty of Nursing

Fukuyama Heisei University

Fukuyama, 720-0001, Japan

E-mail : settle@heisei-u.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.24, No.2, 2015 191 – 199)

